

歴史と真摯に向き合うふたつの作品

「黒川の女たち」(松原文枝) 「アイム・スタイル・ヒア」(ウォルター・サレス)

「黒川の女たち」監督:松原文枝
製作:テレビ朝日 2025年

「黒川の女たち」(監督:松原文枝)を見た。1945年夏、日本から多くの開拓団が移住していた旧満州(中国東北部)をソ連軍が襲った。逃げ惑う人たちの中に、岐阜県白川町黒川から来た「黒川開拓団」がいた。保護と引き換えに彼らは、団にいた18歳以上の未婚女性を「性接待」に差し出した。戦後、生き残り、帰国した女性たちは元団員から差別や中傷を受けた。女性たちは長い間、その事実を語って来なかつたが、やがて彼女らは実名で「隠されてた歴史」を語るようになった。この映画の魅力は、抑圧と隠蔽を撥ねのけて彼女らが解放されていくところにある。またその語りは彼女らの子どもや孫にも伝わり、暖かい支持と支援につつまれていくところもある。

映画パンフレット『黒川の女たち』を全文読んだ。昔は映画を見た時は必ず映画パンフを購入していて、大量の映画パンフを持っていたのだが、今はめったに買わない。久しぶりにこのパンフを購入したのは、「黒川の女たち」が非常に感銘深かつたからだ。いくつか引用しておく。(後者の「アイム・スタイル・ヒア」のパンフも同様)

「これまでの証言(ソ連開戦時、旧満蒙開拓団の女性が受けた性暴力被害)はすべて第三者の証言であり、当事者の証言は皆無といってよかつた。(中略)『私がその当事者です。』と名乗りをあげるひとはひとりもいなかつた。そのくらい性暴力被害の抑圧は強かつた。」「黒川村開拓団にいちはやく注目があつまつたのは、2013年満蒙開拓平和記念館の語り部講演会で、生存者のひとり、佐藤ハルエさんが実名で証言したことによる。それに安江喜子さんが続いた。」(上野千鶴子)

「日常と戦争の連続性を考えなければならない。この映画が描いているものは、果たして『過去』だろうか。(中略)イラクでも、そしてまた、パレスチナの人々に対するイスラエルの虐殺でも、性暴力は繰り返されている。(中略)『連続性』の中の地平に立っている私たちは何をなすべきなのが、この映画からあらためて問われている。」(安川奈津紀)

「アイム・スタイル・ヒア」
監督:ウォルター・サレス 2024年

「アイム・スタイル・ヒア」(ウォルター・サレス)を見た。もう公開時期が過ぎているが、京都の名画座「出町座」でまだやっていたので、見に行った。とても遠くて、くたびれたが、映画は最高によかつた。ウォルター・サレスはブラジルの監督で、ブラジルの貧困を描いた「セントラル・ステーション」(1998年)、チエ・ゲバラの青春時代を描いた「モーターサイクル・ダイアリー」(2003年)の画面が今も鮮烈な記憶として私の中にある。そのサレスが16年ぶりに撮った映画だ。映画は、「軍事独裁政権下で消息を絶ったルーベンス・パイヴァと、夫の行方を追い続けた妻エウニセの実話に基づいている。サレス自身、幼少期にパイヴァ家と親交を持ち、この記憶を、喪失と沈黙をめぐる私的な問いとして丁寧に掘り起こした。自由を奪われ、言葉を封じられても、彼女は声をあげることをやめなかつた。

サレスは、理不尽な時代に抗い続けたひとりの女性の姿を、美しくも力強い映像で永遠の記憶として刻みつける。」(出町座のサイトより)



主演はサレス作品の常連で名優フェルナンダ・トレス。老年期のエウニセを演じるのは実の母であり『セントラル・ステーション』に出演したフェルナンダ・モンテネグロ。母と娘、ふたりの女優が、記憶と時代、そして命の継承を映し出す。この2作品は今年私が見た映画の中のベスト作品だ。

この映画にはおまけがある。映画を見て、気持ちも軽く、帰宅し転倒事故を起こし、大けがをした。12月15日、北摂総合病院の整形外科を退院した。入院は丁度1週間だった。10月末に転倒した左手首のケガが腫んで良くならず、結局全身麻酔で切開手術をした。MIRで撮ると、左手首に3つの木片があり、それが腫んで、いつまでも治らない。このまま行くと細菌が全身に回る可能性があるとの医者の話を聞き、大変危機感を感じ、手術を決心した。術後の患部は、切開した箇所にガラス管が2本入って、そこから汚れた血が流れ出るようになっていた。退院時にそのガラス管を抜いた。経過は順調で、12月25日に抜糸の予定。